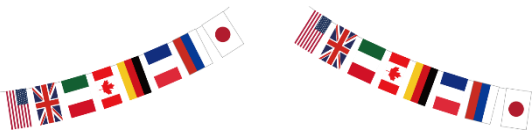


スポーツおじいさんにないたい！③



『チャンプ』

國友万裕



1. ポリープ手術

前回出した原稿依頼、何が俺の人生に起きただろうか。

前回の原稿を提出した直後だったと思う。ミニドックの結果が出て、便の検査に異常が見つかった。と言っても、2日便をとったうちの1日だけである。大したことはないだろうとは思いつつ、早速、近所の病院に行ったところ、ポリープ、最悪の場合は癌の可能性もあるので精密検査を受けることになった。

50代までだったらまだまだ大丈夫という気持ちだったのだけど、今は60歳という年齢がドシッとのかかかってきているので、本当に癌だったらどうしようと心配な日々が続いた。しかも、検査を受ける前は病院で買うように言われた大腸検査前用のレトルトの食事しか食べることができないのでそれが何よりも辛かった。お粥のような、味のしないような食べ物で、美味しくないのである。

いざ、検査当日になってみると、やはりポリープができていたとのことだった。7ミリほどのポリープで、その場でカットしてくれた。ほんの5分くらいの手術だった。そして、その後1時間くらい点滴。

終わったら、美味しいものを食べようと楽しみにしていたのだが、あと3日くらいは油物は避けてくれとのことで、ポリープ手術後用のレトルト食品を買わされることになった。また美味しくないお粥のような食事が続いた。

先生の話だと、おそらく見たところ悪性ではなさそうだったとのことだったが、やはり精密検査の結果がでるまでは気掛かりで

ある。どんより気分が1週間くらい続いたが、検査の結果は良性で、もう通院や検査の必要もないとのことだった。

そのことを普段お世話になっている教会の聖歌隊の人たちに話した。聖歌隊は70代、80代の人が多く、俺なんかまだ若いほうである。「年取ってくるとポリープくらいは誰でもあるよ」と皆んな口々に言ってくれた。こういう人たちが周りにいるのは心強いけれど、それにしても俺も年だなあと思った。

故郷のおじさんは、89歳で透析がだいぶ通りにくくなってきているらしく、施設に入った。86歳の母はこの頃目が見えないらしくて、白内障の手術を近いうちに受ける。歳をとるとだんだんと病気が多くなっていくのだ。悲しい。悲しい。悲しい。人間の健康年齢は70歳過ぎくらいまでなのだそうである。日本人の平均寿命は80歳を超えていて、最近では90歳過ぎまで生きる人はたくさんいるが、頭が呆けたり、体が苦しいのを生き続けていくのが幸せなのだろうか。つくづく、そういうことも考える年齢になった。

クリント・イーストウッドや山田洋次みたいに90過ぎても現役で仕事をする自信は俺にはないのだ。とりあえず、日本では高齢者は65歳からだと定義されている。ということは、まだ高齢者の域にはいるには4年ある。その間に青春を堪能しようと思った。

本当に人生は長いようで短い。俺の人生は10代の頃がどん底だったので、尻上がりではあるが、10代の頃のトラウマをずっと背負って生きる人生だった。

それにしても俺は故郷が嫌いだ。いつも話す少年時代の体育教師は今故郷のある町

の教育長をしているみたいだが、この間、行き過ぎた指導があったことでちょっとした問題になっていた。あの人もう75歳である。やはり、あの人は変わっていなかったのだ。何人の人を傷つけても、困らせても、踏み付けにしても、懲りない奴というのはいるのだ。あの人は俺の人生に一生消えないような傷を残したことに気づいているだろうか。考えたこともないだろう。

俺は故郷にだけは帰りたくない。今年の夏も里帰りをしなかったのだった。

2. 男性性の構築

今年の夏休みの一番の思い出は、京大のプールで泳いだことだった。

京大プールは、比較的に目立つ場所にある。百万遍のところを曲がったところにある生協の裏側である。50メートルぐらいの大きなプールだ。もう京大で教え始めて12年目のはずだが、教職員があそこを使っていいのかどうか疑問だったし、学生に海パン姿を見られるのは恥ずかしいという気持ちもあって、使ったことはなかった。

しかし、今年の夏休み。昨年の教え子で水泳部の子とメッセージのやり取りをしていたら、「年配の人でも泳ぎに来ていますよ」と教えてくれた。電話で問い合わせたところ、非常勤であっても教職員ならば証明書を見せれば入れるとのことだった。よし、行ってみようかと思った。もう俺も60歳だ。やってみたいことは全部やっておかなくては、いつまで元気でいれるかわからないのだ。

行く前に食事しようということになり、水泳部でかつての教え子だった男子学生 2

人と近所のレトロなお店で食事をした。2人とも体育系とは言っても優しい子たちだ。この頃はアメフトや野球の子に聞いても、昔の体育会みたいな厳しい上下関係はないという。そうだといいいけれど、世の中は変わっていくようで変わらない。彼らとひとしきり話した後、京大のプールでちょっとだけ泳いだ。その後、教え子とツーショットで写真を撮った。楽しかった。

俺の人生は、本当に遅いのである。こういう付き合いを人生の早い時期にできていたら、俺はこんな苦しい人生を歩むことはなかったのだ。

しかし、俺はスポーツができなかった。そのトラウマは延々と続いた。今となっては、俺のことを運動神経が鈍いなんて思っている人は1人もいない。もう15年以上前だが、「先生、なんかスポーツやっていましたか？」と男子学生から聞かれた。

「いや、部活とかはやっていない。ただ、プールは長年通っていたけど・・・」

「そうでしょうね。何かやってそうだなあと思っていました。体ごついですものね」と言われた。

彼だけじゃない。大体俺は体の横幅がでかいので見た目はそんなふうに見られるのである。しかし、少年の頃の俺は体はそれなりにでかくてもいかにも不器用そうでスポーツなどできなそうに見られていたため、散々いじられ、傷つけられたものだった。体育の先生が、平気でできない子の心を傷つけるんだから、子供ができない子を傷つけるような子に育っても仕方がないのである。本当に返す返すも悪夢のような少年時代だった。

今更それを言っても始まらない。世の中

は理不尽にできていて、先にあげた体育教師のような、人の心を壊すことを何とも思わないような男であっても覇権を握る。その一方で、何の罪もない人が、理不尽に早逝したりするのである。まさにこの世はカオスなのだった。

母からは、「あなたの子供の頃の傷ついた経験は、今、あなたの本のネタになっているからいいじゃないの」と言われる。しかし、俺はこれまで4冊本を出したけれど、たいして売れていない。俺の名前なんてWikipediaにだって出ていない。最初の本の時は京都新聞に写真入りで記事が出た。朝日新聞の書評にも小さく記事が出た。共同通信にも北原みのりさんの書評が出た。2冊目の本の際は、週刊文春とサイゾーに記事が出た。3冊目の時はキネマ旬報。だけど、誰も俺のことなんて知らんのだ。

今回の本はまだ今のところ、何の取材もない。おそらく今回はこれまで以上に何の話題にもならず終わっていくのではないかな。別に有名になってチャホヤされなくてもかまわない、ただ、俺がこれまで長年にわたって苦しんできたことを世の中の人にわかってもらいたい。母からは、「だいぶわかってくれる社会になって来ているじゃないの。昔とは相当変わって来ているわよ。もちろん、変わらない人もいるけど。だんだんとあなたが言っていたような社会になって来ていると思う」と言われる。

確かにそうなのかもしれない。先にあげた体育教師みたいな男は今となってはマイノリティ、社会は変わったと思いたいけど、この間、たまたま映画を見に行ったら、『うちの弟どもがすみません』という映画の予告編をやっていて、そこで男の子たちが上

半身裸で騎馬戦している様子が出て来た。まだいまだにあんなことを強制している学校があるのだと呆れてしまったものだ。

そう言いながらも、俺は体育会コンプレックスがあって、今でも体育会っぽいことに憧れている一面もあるのである。ボクシングの練習には今も通っている。10日に1回くらいのペースなので、たいして上達はしていない。ただ、ジムに行くと、20代の若い体育系の男たちと時間を過ごせる。上半身裸になって練習することもできる。あれが俺にとっては喜びなのである。マッサージの人にも例によって来てもらっている。この頃は来てもらうたびに、痛いビンタを喰らわしてもらっている。一瞬はすごく痛いのだが、ビンタされると「男になった！」という気持ちになって嬉しくなるのだ。

アメフト部の教え子2人とも食事に行った。アメフト部とは言っても、決して荒っぽいタイプの子じゃない。むしろ、優しくて、あれこれ気を遣ってくれるし、ソフトである。食べた後は遠回りして、バスの停留所まで一緒に歩いてくれた。

こういう子が俺の息子だったらなあと思う。俺は60歳になって一番の後悔は、子供をもたなかったことなのである。アメリカ映画は父と息子を描く映画が多い。俺は、俺の親父がコミュニケーション下手の人だったので、アメリカ映画を見るたびに、そういう父と息子関係に憧れたものだった。

実際周りの人たちを見ていると、子供がいるからつらいことがあっても頑張れると言っている人は多いのだ。独身の頃はこんな人が親になって大丈夫なのかと心配になるような人でも、子供ができると必死で頑張ろうとする。子供って不思議な力を持つ

ているのである。

しかし、俺は、今となっては息子を持つなんてことは絶対にできない。子供を持つ経験をしないまま俺は一生を終える。俺の遺伝子は淘汰されるのだ。俺は苦しみで苦しんだ人生だったから、こんな遺伝子亡くなった方がいいのだろうけれど。

3. スポーツができる男たちは・・・

①M くん的人生

俺の中学時代、M君という男の子がいた。

実を言うと俺は彼のことを小学校の頃から知っていた。俺の中学は、二つの小学校が合併した形でできあがっていた。彼は俺とは別のもう一つの小学校の子だったのだが、小学校6年生の頃に通っていたYMCAの英語教室で一緒だったのである。

彼は最初の頃同じ小学校の女の子たちから「おかま」と呼ばれて馬鹿にされていた。俺と似たようなタイプの子なんだろうなあと思っていた。ところが、途中から女の子たちの態度がガラッと変わった。彼は子供の頃からバイオリンをやっていて、それでそのツアーでヨーロッパに行ったとのことだった。それがあってからが女の子たちの彼に対する態度が180度変わったのである。あー、つくづく女はヒーローを求めるものなのか。それまで散々いじめといて、彼が海外旅行の経験もあるバイオリンの有望株だと分かった途端に態度を変えたのである。

俺も小学校の頃はM君と同じく、女の子っぽい子ではあったけど、それゆえに女の子の友達が多かった。小学校6年の時に、器楽クラブで演奏したこともあった。当時器楽クラブは女の子が大勢で男は3人しか

いなかった。いじめられ、馬鹿にされてはいても、決して女の子と話ができないタイプではなかった。

ところが、転機がやってきたのは中学 1 年の時だった。俺の通っていた中学は、市内でも最もガラが悪いとされていた公立の中学だった。しかも、1 年生の時の組み替えで、最も悪ガキの多いクラスに振り分けられることになったのだ。俺が友達になれるようなやつなんていなかった。そして、女の子たちから、「気持ち悪い」と陰口を言われる日々が始まったのだ。

その後、M 君と一緒にのクラスになったのは 2 年生の時だった。俺はもうその当時心が壊れかかっていて、誰も友達すらいなかったし、誰とも付き合いたくとも思わなかった。担任の女性の先生は、「M 君なんかだったら、國友君と合いそうな気がしますけどね。」と面談の時に母に言ったのだそうである。

彼は天使のような心を持った男の子だった。芸術的なことが好きで、感受性が強いタイプだと言うことでは確かに俺に似ているのかもしれない。映画も好きみたいだった。だけど、俺みたいに反抗するタイプではなかった。彼は受容するタイプだったのである。話し方なんかは女の子そのもので、自分のことを、「俺」とか「僕」ではなくて、「自分」と言っていた。俺もあの当時は、自分のことを「僕」とは言っても、「俺」とは言えなかったものだ。

確かに彼だったら友達になってくれていただろうし、親友にもなれるような気がしていた。しかし、俺と彼の決定的な違いは、彼はスポーツができたことだった。

一般に「オカマ」とか言われて揶揄われる

タイプの男子は、スポーツ音痴のやつが多い。ところが、彼は女性的で優しい子で、運動も自分から積極的にする子ではなかったのだが、天性の運動神経をもっているらしくて、足はクラスで 1、2 を争うくらいに早く、他のスポーツも人並みより遥かにできる子だった。

一方で人並外れたスポーツ音痴だった俺は、中学の荒っぽい体育教師たちについていけず、将来にも希望はもてず、女子たちから心無い意地悪をされつづけ、もはや、学校に行くのがやっとという雰囲気になっていた。

今だったら、まだ不登校の道がある。しかし、あの頃は不登校という言葉すらない。どれだけ辛くても、どれだけ酷い目に遭わされても、どれだけ被害者であっても、学校から逃げることはできなかったのだ。俺はひたすら空想の世界で遊ぶしかなかった。思えば、小学校までは俺の家に遊びに来る子はたくさんいたのだ。しかし、中学になってからは遊びに来る友達もいなくなった。俺はもう誰ともつきあいたくない。自閉的な状態に陥っていたのだ。

M くんは、高校卒業後、東京の有名音楽大学に進み、NHK 交響楽団に入った。NHK 交響楽団と言ったら大変なものなのだそうである。家もきっとお金持ちだったのだろう。財産家だったのかもしれない。バイオリンを習おうと思ったら、まずバイオリン自体が高い。レッスン代も高い。そして音大に行くとなったら、相当のお金がいるはずなのである。

俺だって家はお金がないわけではなかったから、もし、スポーツができて、人並みに高校に行ってという型通りの人生を歩んで

いたら、東京の名門大学に入って、スムーズな人生を歩んでいたのかもしれないのだ。

だけど、俺にとってはスポーツが癌だったのである。

②S君の人生

S君は俺の教え子である。

彼は俺の授業を4つもとっていて、おそらく最高記録保持者だ。今まで3つとった子はたくさんいたけど、4つはいなかったと記憶している。

彼は今、ある東京のキー放送局のアナウンサーである。彼はお父さんがアメリカ人ということもあり、超イケメンで、授業中もよく喋ってくれる子だった。俺は彼には本当に感謝しているのだ。真面目に勉強する子ではなかったが、彼がいると授業がしやすかった。

長年教師生活をしていると色々な子がいる。一般には日本人の学生はあまり話したがらない子が多いのだが、黙ったような子ばかりだとそれはそれで授業がやりづらくなる。だけど、俺は俺自身があまり話できない性格だったため、話ができない性格の子の気持ちはわかるから無理に話させるのは可哀想になる。一方で、話をすることに躊躇しない子もいるのだが、中には生意気で、俺を舐めていて、俺を馬鹿にしたような絡み方をする子もいるのだ。

しかし、S君の場合は、俺が話をふらなくとも次々に面白いことをいってくれる。しかも、周りのムードを高めるような話してくれるし、嫌なことは絶対に言わない、ただ単に口数が多いというだけではなく、当をいたことをいってくるため、彼のおかげで救われたことが何度もあった。俺の30年

以上にわたる教師生活の中でもベスト教え子の1人である。彼とは本当に仲が良くて、一緒にご飯を食べたことも何度かあった。

そんな彼だからテレビのアナウンサーなんてまさに天職である。ただ、彼はテレビに勤めるようになってからは個人のインスタやラインを切ってしまった。おそらくテレビに出るようになったから、個人情報が流れるのは困ると判断したのだろう。公式のインスタにコメントすると必ずいいね！してくれるので、俺のことを忘れてはいないと思うが、個人的に連絡を取り合うことは難しくなってしまったのだった。

いつかきっと京都に訪ねてきてくれることを願っているのだけど、おそらく忙しくて、それどころじゃないだろう。一旦、住む世界が変わってしまうとどれだけ親しかった人であっても、忘れていくものなのだ。

『モリー先生との火曜日』という先生と教え子の師弟愛を描く有名なノンフィクションがあるが、あの話でも、モリー先生と教え子のミッチが再会するのは、卒業後15年くらい経ってからである。

彼と俺は、顔は雲泥の差だが共通点があって、誕生日が3日ぐらいしか違わなくて、魚座でA型。しかもちょうど3回り違っているので干支も同じ辰年である。しかも、六星占術でいうと木星人のプラス。何から何まで同じである。

ただ、決定的に違っていたのは、彼は小学校の頃から野球少年のスポーツマンであったことだ。しかもお父さんがアメリカ人だからなのだろうが、体がガッチリしていかっこいい。

彼とは、先生と生徒という立場だから仲良しになれたけれど、同級生だったら仲良

しにはなれなかっただろう。俺は子供の頃スポーツができないことが引け目になって、誰とも付き合うことはできなかったのである。俺がスポーツができていたら、俺だって東京の大会社に勤めることはできたのかもしれないのだ。顔はイケメンじゃないからアナウンサーは無理にしても、テレビ局の仕事につけていたのかもしれないのである。

つくづく、俺にとってはスポーツ問題は癌だったのである。

4. 『チャンプ』(フランコ・ゼッフィレッリ監督・1979)

トイアンナさんの『弱者男性 1500 万人時代』という本が出た。奥田祥子さんの『シン・男がつらいよ 右肩下がりの時代の男性受難』という本も出た。そのほかにも着々と男性被害を訴える本は出ている。

トイさんの本だったと思うが、「弱者男性とフェミニストは食い合わせが悪い」「弱者男性は初期のフェミニストだ」という指摘があった。確かにその通りである。

俺はこれまでフェミニズム系の女性たちと付き合ってきたが、彼女たちと話していて、どうしても反発していたのは、「男の人は見えない権力を握っている」「結局は男が決めるのよ。女はいつだって蚊帳の外」などと言われることだった。

俺は男だけど、1 回だって権力を握ったことはない。むしろ女性から馬鹿にされ、陰口を言われ、心を壊され、60 歳になってもそのトラウマをどうすることもできない身だ。その俺に向かって、こういう理論をぶつけてこられたのでは腹が立つのである。

とは言っても、そういうフェミニストはもう 70 代以上の人である。あの人たちが若い頃はまだ次元の低い時代だったのだ。

最近になって、真田広之が若い頃に主演した『吼えろ鉄拳』(鈴木則文監督・1981)という映画を見た。当時人気絶頂だった松田聖子主演の『野菊の墓』の併映作だったのだそうである。これはスポーツ映画というよりも、アクション映画なのだが、日本の 80 年代がわかって面白い映画だった。

この映画が出たのは 1981 年。すなわち、俺が 17 歳の頃である。俺はあの頃大検を目指して勉強していた。と言っても、1 人で勉強するのは大変だった。ただ、今思えばあの当時は、一筋の光が見え始めた頃だったのである。精神的には前向きになっていた。バイクの免許も取りに行き、一時期ほどのどん底状態の俺ではなくなっていた。

しかし、道は長かったのである。そのあと、18 の時、1 年間塾に通い、どうにか大学には入ったものの、それからがまた底辺を這いつくばる日々が待ち受けていた。混乱と迷走の大学生活。嫌いな子からストーキングされたり、ゼミの先生からパワハラまがいのことをされたり、ろくな思い出はないのである。

この映画を見ていると本当に 80 年代はアホな時代だったのだと思い知らされるのである。

あまりにもストーリーが単純。男の方は上半身裸で対決する。彼が殴りに殴られる場面が出てくる。女の子からプールに突き落とされる場面も出てくる。男は自分で自分を笑わなくては！という意識がムンムン。しかも、一方で、女の方は目が見えなくて、体の弱い、無力な女として描かれる。しかも

これを演じているのが志穂美悦子である。アクションができる先駆的な女優なのに、よくこんな役を引き受けたものだったものだった。

不登校になって、1年目の頃だ。あの当時は外に出るのもままならなかった。土日に映画を見に行き、知り合いの子にあたらどうしようという気持ちでいた。しかし、平日に映画を見ようと思うと補導される可能性がある。本当に八方塞がりだったのである。

家は商家だったので、仕事が忙しく、母も時間をつくれなかった。そんななかで母は時々映画に連れて行ってくれていた。あの当時見た映画も、やはり今思えば御涙頂戴的な陳腐な映画が多かったのである。

この当時の映画として記憶に残っているのは、『チャンプ』だ。『チャンプ』はジョン・ヴォイトとフェイ・ダナウェイというアカデミー賞主演賞受賞の2人が離婚した夫婦を演じていて、何よりも話題になったのはリッキー・シュローダーという天才子役が息子役を演じていたことだった。

この映画は、ダメ男の父親が、息子のためにボクシングで戦い抜いて死んでいく話である。涙話である。アメリカ映画らしい父親ものだった。客席は泣いているお客さんがたくさんいた。しかし、俺は泣けなかったのだ。先にも書いた通り、俺は、父親が愛情表現が下手な人だったため、父と息子の愛を描く映画は大好きである。こういうのに憧れるからだ。

とは言っても、この映画に関しては感動できなかった。あまりにも話があざといのである。あそこまで悲しくすることはないだろうと思うような映画。実際、日本でも

批評家の人は大して誉めていなかった。アメリカでの評価もそこそこだったのに、日本では宣伝が功を奏して一般の観客にはメガヒットだった。

この時代の日本人は、こういう御涙頂戴もの、人が死ぬような話に心を動かされる。まさに幼稚な感性の時代だったのである。人生なんて、そんな単純なものじゃない。人が死ぬのを見て喜ぶなんて悪趣味もはなはだしい。あの当時の日本は平和、だから人が死ぬくらいしか、悲しいことがなかったのかもしれないのだ。あの頃は景気のいい時代で、その10年後には、バブルがはじけて、全てが間違いだということがわかっていくことを誰も予想してはいなかったのだった。

この日本で、弱者男性をわかってくれる時代がいつやってくるのか。「弱者男性は初期のフェミニスト」なのだとしたら、弱者男性の問題が根付くのにはあと20年はかかるだろう。俺が生きている間にそういう時代がきますように。それだけを祈りたいけれど、それも神様のみぞ知ることである。